

知識人としての明るさとゆとり

小川平二

一年生代議士だった私が、はじめて池田大蔵大臣の秘書官であった大平さんに挨拶する機会を得たのは、高等学校の同窓であるA新聞社のY記者を池田さんに紹介申し上げるために二ノ橋の大蔵大臣公邸を訪ねた時でした。大平さんを交えて一緒に食事をしたあとで、大平さんが大蔵省の役人であることを知って、「驚いた。あなたはY記者の同業の出身かと思いました」といったことを今でもおぼえています。顔には何かしら不敵なつらだましいのごときものがうかがわれるので、よもや役人ではあるまいと思つたわけです。第一次の池田内閣では、私は官房副長官で、大平さんの手伝いをする役目をおおせつかりました。組閣の直後に、酷暑のなかを、冷房のよく効かない車で、お伴をして新聞社に挨拶回りをしたことを昨日のこのようにおぼえています。

選挙が始まると早速に私の選挙区へきてくださいましたが、旅館で一緒に昼食をしたとき、「小川さん、僕はあなたと同期だったなあ」と大変心配そつな顔で私の顔をのぞき込みました。大平さんのいわんとするところは直ちに判明しました。同期生で、一方は官房長官、一方は副長官では、自分がきたことがかえってマイナスになりはせぬかというのです。大変にデリケートなところのある人だなと、食後の草餅をひと口にほおぼっている大平さんの顔を眺めながら思つたことでした。街頭の演説は、その当時から大音声の、地の底から湧いてくるような力強い調子であり、機智縦横ともいふべき屋内の座談の軽妙さも、また然りでありました。

後年、これも私の選挙区で、後援会の演説が、テレビのアーウー調とあまりにも異なり満場を抱腹絶倒せしめ

る体のものであったので、聞いていた一人が、隣の人の袖を引いて「おいおいあれがホンモノかい」といったという話をご本人の耳に入れました。大平さんの爆笑した顔を忘れません。

人も知る読書人でした。最近、女婿の森田一代議士に聞いたところでは蔵書八千冊という。私は大平さんのことを思うと、よく高等学校の教科書に出てきた「ソクラテイツシエ・ハイテルカイト」という言葉を思い出しました。ソクラテスの明るさという言葉の意味するところを、私が正しく理解しているかどうか解りませんが、学ばざれば暗しの反対で、学んだ人の明るさ、知識人の明るさとゆとりというほどの意味でしょうか。大平さんと向い合っているいつも明るさとゆとりが感じられました。まさにこのような情況を示すためにこの言葉は作られたのだらうと思われるような極めて適切な言葉を、適切な場所にはめ込む独得な才能、その根底にある豊かなボキャブラリイも、長い間にわたるたゆまぬ読書のためものであったに違いありません。

私は、五十部だけ印刷した随筆集の一冊を大平さんに呈上しましたが、ある朝宏池会の事務所で、入ってくるなり「今まであなたの本を読んでいた。ああいつのをほんとうの知識というのだろうか。それに比べるとわれわれのは……」。若干の雑学的知識をひけらかしたはずかしい文章で、もとより過褒であるこというまでもありませんが、最近にお近づきになったさるお方から、「大平さんから小川君の本を読んでみるといわれて、ご本をお借りました」といわれました。ここに至って私はほんとうに感激しました。

大平さんと最後にお目にかかったのは昨年の五月、日米の自動車問題でお宅をお訪ねした時でした。この時の「なぜカーターはもうすこし冷静になつてくれないのだらう。人質の生命ももちろん大切だ。しかし世界の平和はもつと重いじゃないのかね。」この言葉が未だに耳朶に残っています。私は大平村の一村民として、そこはかとなない憶い出をつづり、「土よ大平さんの上に軽かれ」と祈るのみです。

(衆議院議員・元労働大臣)